

C. バイイの言語学説の基礎

——ソシュールからグベリナへの道標——

研究員 築山 修道

1. はじめに

『言語活動と生活』(*Le langage et la vie*, 1926)の著者バイイ(C. Bally)は、メイエと共にソシュール言語学派の一翼を担う高弟の一人であった。すなわち、パリ学派はメイエによって代表されたが、もう一方のジュネーブ学派はバイイとその同僚A. セシエによって代表された。しかしソシュールの最も力を注いだ「静態言語学」の建設は、ジュネーブ学派の専念するところとなった。そしてバイイの「文体論」も、正しく師ソシュールの言語理論の上に建てられた、ソシュール・バイイ言語学の成果とも言うべきものである。

然るに、バイイの『言語活動と生活』とは如何なる書物であろうか。彼はその中で言語についてどのような所見を展開しようとしているのか、以下少しく見てみよう。

2. 言語活動の本質

本書は、六篇から成るが、元来各篇はそれぞれが独立した論文であったために、反復重語も多い。しかし、勿論、各篇は密接な内的連関をもっている。これらのうち第一篇と第二篇において、言語及び言語学についての著者の基本的な見解が呈示されている。つまり、第一篇の「言語活動と生活」においては、それが本書全体の表題になっていることから明瞭されるように、我々の言語活動の本質が何処に求められるべきであるか、そして又そのことと関連して、言語の研究は本来如何にあるべきかが説かれている。第二篇においては、第一篇の所見に基づいて、彼の言語学的研究の一つの中心をなす「文体論」の何たるかが語られている。すなわち、著者は本書の冒頭において、第一篇の「言語活動と生活」の主意について次の如きことを言っている。

「本書の狙いは、自然的言語活動はそれが表現する個人生活及び社会生活から、その働きと進化の根本的特質を得ているということを示すことにある。すべて生活の諸現象は、そこに我々の本性の情的及び意志的要素が恒に現存し、しかも、しばしばそれが優勢であることをもって特徴とする。従って、理知は大変重要ではあるが、そこでは手段の役割しか務めない。その結果、このような特質は自然的言語活動のうちに反映して、言語活動が純然たる知的構成物であることを妨げており、又いつでも妨げるであろう。尚、このような諸原則を叙述する目的は、私が文体論の名を以て呼ぶところの研究部門を心理学の枠内に収めることに

ある。かくして、私は、言語活動が感情の表現であり行動の用具であるとして研究することが、言語学にとって肝要であることを強調せんと試みたのである。^{注1}と。著者のかかる言説から、我々は先の言語及び言語学についての根本的な問題に対する彼の基本的な解答を読み取ることが出来るであろう。つまり、バイイは言語の本質はそれが現に生きて働いているその現場において捉えられなければならないという考え方から、言語の真相が最も具体的に顕現する現場は、自然的言語活動であると考ええる。そしてかかる自然的言語活動は個人生活及び社会生活を表現するものであるからして、それは、我々の生活と密接不離な関係にあるのみならず、一層根本的には、我々の生活のうちにその基礎をもっていると考えるのである。それ故に、言語活動はその働き及び進化の根本的特質を我々の生活から得ていると言わざるを得ない。ここに先ず言語活動と生活との本質的な結びつきが存する。然るに、一般に人間生活の事象は第一義的には知的要因よりも情意的要因に一層深く依拠しているがために、その結果は、当然自然的言語活動のうちにも反映すると考えられなければならない。このような考えから著者は、自然的言語活動においては情意的要素が知的要素よりも優勢であることがその特徴であって、且つ言語活動の第一義的な性質もそこに見い出されるのであると言っている。従って著者は、言語活動における知的作用の重要性を認知しつつも、生きた具体的な言葉で、純然たる知的構成物であるような言語はあり得ないことを指摘し、むしろ、言語活動は第一義的には我々の生活における様々の感情を表現し、行動に役立てんとする用具であるという見方を力説する。そして著者は、このような言語及び言語研究に関する根本洞察から、言語活動の諸現象について、豊富な資料を駆使しながら、様々な考察を行なっている。今、それらのうちから興味あるいくつかの見解について見てみよう。

3. 話し言葉

先ず、彼は言語活動の本質を書き言葉＝文語 (langue écrite) ではなくして、何処までも話し言葉＝口語 (langue parlée) のうちに見い出そうとするのであるが、それは彼が師ソシュールの言語学を継承せんとする限り当然とも考えられる。しかしそのことは、より本質的には、ギリシア以来行なわれて来た古典的言語学をはじめ、従来の種々の言語研究に対する批判であり、言語学自身の自らの基礎づけのための根本的な反省を意味するものであった。つまり、従来言語研究は言語をそれ自体として解明しようとする学的動機からではなくて、功利的見地から、例えば、雄弁術、作文術、修辞法等のために役立たせようという目的から遂行されていた。そのためにそれは、極めて術的若しくは実践的な性格の強いものとなり、言語活動の本質をそれ自体において明らかにすることは出来なかった。しかし、言語活動の存在理由や真の性質をそれ自体として明らかにするためには、言語が話されている実生活の現場において、すなわち自然的言語活動それ自身に即して、それらの内に働いている諸法則や構造がそれ自身の内から捉えられなければならない、と著者は考えるのである。かかる観点からする時、書き言葉＝文語は既に知的反省作用を経た表現であって、それは、感情を伴った意欲や生活衝動の直接的な発露であり、また行動を媒介する情意的表現としての話し

言葉＝口語に比べて、既に生活から離れた且つ知性によって構成された間接的・抽象的表現という性格をより強くもっている。従って、バイイにおいて言語研究の場が従来の文語中心から口語中心へ移されたということは、我々が上に見たごとき彼の言語観の根本的立場からして当然の帰結ではあるが、そのことと連関して注目されるもう一つの点は次のことである。つまり、言葉が語られる実生活＝自然的言語活動の場において、生きた言葉の一般的諸法則や構造を捉え、以て言語の真相をそれ自身の内から明らかにするためには、現象学的・記述的な方法が必要であって、そこへは史的視点或いは方法が持ち込まれてはならない、と著者が力説している点である。そして彼は、このような史的方法を排除した言語活動の記述的・構造論的研究を「静態言語学」と呼び、それが従来の言語研究とはその立場と方法を質的に異にする、生きた言語即ち言語活動の純粋に学的な研究であることを強調するのである。

4. 言語における進化と進歩

次に注目すべきは、著者が、言語に関する限り一般に「進化と進歩」ということが混同されていて、言語研究上種々の誤解を生じていることを指摘している点である。それ故、彼は両者の区別を明確にすることによって、言語研究における方法上の癌をなすある種の誤解を解消しようとするのである。つまり、言語活動というのは創造と破壊、或いは、再構築と崩壊との不断の交互作用であって、それは絶えず変化するものではあるが、しかしその変化は必ずしも改善でもなければ、又それが改善であるという確かな証拠を見出すのは非常に困難なことである。従って、進歩を「改善」という意味に取るならば、言語活動、就中、自然的言語活動における変化は「進化」とも言うべきものであって、むしろ「進歩」とは我々の生活上必要な信念乃至信仰にすぎない、と著者は考える。それ故に、著者は言語の進歩を必ずしも否定するものではないが、しかしそれについては極めて懐疑的である。このような考え方から様々な見解が帰結するのである。例えば、言語（文法、表現型、語彙、音韻等）の変化は論理的（知的）進歩の要求によってよりも、むしろ生活（情意的表現）の要求によって決定される比重が大である。また、論理的思考乃至分析の進歩はある面（表現型、語彙等）で言語活動における表現性の進歩をもたらし得るとしても、それは必ずしも全面的に表現性の改善に結びつくものではない。従って、文明社会の民族によって話される言語は、未開社会の民族によって話される言語よりも、言語それ自体としてより卓越しているとは必ずしも言えないのである。著者の言葉を借りれば、「ある言葉が劣った文明の反映であるからと言って、直ちにそのことからして、その言語そのものが原始的であるとは言えない。……言語の進歩は文化の曲線を追うものではない^{注2}」からである。つまり、人は文明的度合いの開・未開、或いは、文化程度の高低と言語的価値の優劣とを重ね合わせて、若しくは、混同して判断しがちであるが、しかし両者は決して直ちに同次元において論ぜられるべきものではないということである。そして自然的言語は、第一義的には生活上の必要性からその変化が促進されたり、逆に、抑制されるのであって、論理的理解或いは美的理想を追求することから生起する変化乃至進化はあくまでも第二義的なものである、と著者は考える。このよ

うな見解から我々は、バイイの言語観が客観的・論理主義的・形式主義的な立場からの理解ではなく、主観的・心理主義的・生命論的な言語理解の立場に基づくものであることを看取り得るであろう。

5. 文体論

第三に注目される点は、彼の「文体論」(stylistique)である。文体論とは、言語の表現的特質を明らかにすべく、著者の言語研究の中核をなすものであるが、彼によればそれは、何よりも作文術とは截然と区別されなければならない。そしてそれは、単なる文法論でもなければ、また、諸種の文学的文体の美学的特質の研究(それは文学評論乃至文学史に属する)をも意味するものではない。では、文体論とは何か。彼によれば、ある言語の表現的特質は比較という方法によって明らかにされ得るが、それには外国語との比較による外的観察と、同一国語における主なる表現型を比較する内的観察とがある。そして両者は、それぞれ異なった側面からその言語の特異性を引き出してくれる。著者はかかる二通りの方法を「比較文体論」(la stylistique comparative)と「内的文体論」(la stylistique interne)と呼び、両方法はその特質と課題を異にするが故にその研究の成果もまた全然別であるが、その言語の表現的本質を明らかにするためには、後者は前者の方法よりも一層根本的であると考えられる。しかし、勿論、両者は相互に補足される必要がある。

6. 内的文体論

然るに、バイイの文体論は内的文体論に属するものである。彼自身次のように語っている。「シュトロマイエル(F. Strohmeyer)の『フランス語の文法』と拙著『フランス文体論詳説』とを比較するならば、一目瞭然である。出発点も結論も相異している。両方法とも比較法であるが、その比較の要領が同じではない。シュトロマイエル氏はフランス語の根本的構成的特質を引き出すためにドイツ語を援用するのであるが、私はフランス語の表現手順の特質を明らかにしようと当言語の知的要素と情的要素とを比較するのである。私にとっては文体論の課題は、与えられた時期において話し手の思惟及び感情の働きを表出するのに役立つ表現型とは如何なるものであるかを尋ね、このような型の使用によって聴き手の裡におのずと生ずる効果を究めるにある。」^{注3}つまり、内的文体論は話し手または聴き手における言(parole)と思想との関係を定めようとするものであり、言語(langue)を実生活との関係において研究するのである。そして内的文体論の課題は、普通語に範囲を限定しているとは言え、文体の萌芽をさらけ出し、その原動力が言語の最も平凡な形態のうちに隠れていることを示すことである。その意味で文体(style)と文体論(stylistique)とは明確に区別されると同時に、隣り合った二つの領域である。^{注4}従って、文体論は言語活動の一部分の研究ではなく、言語活動全体を或る特殊な一つの角度から眺めての研究である。即ち、情的言語活動が知的言語活動と独立に存在し、文体論は後者を排して前者のみを研究すべしと言うのではない。文体論は両者の相互関係を究め、かくかくの表現型を組成するにはそれらがどのよ

うな割合で結びつくかを調べるものである。^{注5}そして文体論的研究の対象として、音韻論、語彙論、統辞論等が含まれるが、ここにおいても著者は「実生活から湧き出る自発的な表現は文学的表現の隠れた原動力を発見せしめる^{注6}であろう」と語り、またもや文語に対する口語の優越性乃至言語としての根源性を力説するのである。

注

テキストは Charles Bally: *Le langage et la vie* (Paris: Payot, 1926) による。バイイ著、小林英夫訳『言語活動と生活』(岩波書店、昭和16年)を参照した。

注1 p. 12.

注2 pp. 89-90.

注3 pp. 107-8.

注4 pp. 110-1.

注5 p. 114.

注6 p. 133.